慢性疾患を持つ子どもに関する手記からの学び
―内容分析技法を用いた学生の読後感レポートの分析―

奈良県立医科大学医学部看護学科
森　ウメ子

Learning from a Note by the Child with Chronic Disease
-The Analyses of the Student's Reports by the Technique of Analysis of Contents-

Umeko　Mori
Nara Medical University School ofNursing

要　旨

本研究では、慢性疾患を持つ子どもに関する手記において内容分析を用いた学生の読後感レポート（以下、レポートと言う）の分析を行い、レポートに用いられている用語の特徴から学生の学びを明らかにすることを目的とした。レポートに多く使用されていた「名詞」は、子ども（子・児・小児）・ナオ（直也）、家族（親・両親・母親・兄・弟）、病気、治療、自分、がん（ガン・癌）、手術、再発、人、私の順であった。さらに、レポートに５回以上使用されている名詞において類似しているものをカテゴリ化すると、対人、病態、心理、情報、自己認識、時間、コミュニケーション、病院環境の８カテゴリに分類できた。また、多く使用されていた「動詞」は、思う（い、った）、考える（られ、よう）、できる（た、て、ない）、言う（い、われ、って、った）、感じる（た）、がんばる（り、れ、った）、受ける（れ）、わかる（かった、り）、見える（られ、て）、行く（き、って）、生きる（かし、きれ）の順であった。これらの動詞について連動する文脈から読み取り「コロケーション解析」を行った結果、学生は闘病生活における患児の気持ちに共感し、気持ちの共有と病児の理解につながる学びと、自己の小児看護に対する認識を深めることができた。

キーワード：慢性疾患を持つ子ども・内容分析・手記

Ⅰ．はじめに

小児看護学援助論の講義は第２学年の通年科目であり、学生は病気を持った子どもと接する機会が殆どないため、講義だけでは病児の理解は不十分であると考え、慢性疾患を持つ子どもについて書かれた手記を読んでレポートすることを課題とした。まだ臨地実習が始まっていないこの時期に、手記を読むことで慢性疾患をもつ子どもたちはどのような状況におかれ、どのような体験をしながら生活しているかを知り、病児に対する理解を深めることは、その後の小児看護学実習に対する動機付けともなると考える。

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

平成17年度N医科大学医学部看護学科2年次の小児看護学援助論講義のなかで、慢性疾患を持つ子どもについて書かれた手記を読んでレポートすることを課題とした。提出期間は平成17年10月27日から12月22日までの約2か月とした。本の選択は学生の自由とし、レポートの内容は自由記述とし字数は1200字程度とした。75名の学生が読んだ本は48種類に及んだが、山崎敏子著「がんばれば、幸せになれるよ」を読んだ学生が最も多く10名であった。この10名の学生のレポートを分析対象とした。本の内容は母親である山崎敏子氏が、5歳の長男直也君(ナオ)の発病(ユーイング肉腫)から5度の再発と4回もの手術を体験しながら、9歳で死に至った闘病生活について、直也君の残した言葉をもとに綴った手記である。

2．分析方法

レポートの分析は、クリッペンドルフの内容分析の技法を用いて解析した。本研究では次の手順により分析を行った。

1）レポートをパソコンによりテキスト化する。

2）記録単位(分析単位)を単語とし、形態素解析ソフトを用いて文章を品詞ごとに分解する。その後、「名詞」「動詞」について、各々の単語の出現頻度を求めた。

3）出現頻度の多い名詞について類似しているものをカテゴリ化する。

4）出現頻度の多い動詞の中で特徴的な単語と連動する文脈を調べる(コロケーション解析)。

分析ソフトには茶筅、SPSSVer11.0及びKWIC Finderソフトを使用した。

3．倫理的配慮

口頭および書面で研究の主旨を説明し同意を得た。データはパソコン処理し、また個人名は特定できないようにしてプライバシーを保護した。

Ⅲ．結　果

1．名詞の出現頻度

レポートの全体における、名詞の出現頻度を表1に示した。全体における名詞の出現頻度は2991回であり、第1位:子ども・子・児・小児・ナオ・直也(247回)、第2位:家族・親・両親・母親・兄・弟(126回)、第3位::病気(62回)、第4位:治療(48回)、第5位:自分(43回)、第6位:がん・ガン・癌(33回)、同じく手術(33回)、第8位:再発(30回)、第9位:人(26回)、第10位:私(25回)であった。第11位以降は、必要、告知、看護師・看護者、本、時、痛み、心、精神・精神的、今・今回、入院、ケア、言葉、思い・思いやり、理解、説明と続いていた。

2．名詞におけるカテゴリ化

名詞の中で5回以上の使用があった単語について、類似している語をカテゴリ化し、ネーミングを行ったものを表2に示した。カテゴリ化にあたって名詞の出現頻度第5位の自分については「･･･自分が死んだ後の･･･」のように患児を指している単語が27、「ナオを自分の子どもとしてでなく･･･」のように母親を指定しているものが14、「この本を読み終えると、自分の心が痛んだ」のように学生を指定しているものが2であった。このため以下に示すカテゴリで、患児及び母親を示す自分を「対人」に、学生を示す自分を「自己認識」に配した。カテゴリ化するにあたって出現頻度の多かった単語の纏まりから順に1つ目のカテゴリは子ども・小児、ナオ・直也、母親、自分、人、医師・看護師・看護者・医療者、親・両親・母親・兄・弟・家族、友達等「対人」に関する用語で構成されていた。2つ目のカテゴリは病気、治療、手術、がん等で患児の「病態」に関する用語から成り立っていた。3つ目のカテゴリは痛み、闘病、心、苦しみ、精神・精神的、思い・思いやり、気持ち、不安、幸せ、心配、ストレス等で「心

表1　名詞出現頻度

	名　詞	回数	%
第 1位	子ども(子、児、小児)、ナオ(直也)	247	8.3%
第 2位	家族(親、両親、母親、兄、弟)	126	4.2%
第 3位	病気	62	2.1%
第 4位	治療	48	1.6%
第 5位	自分	43	1.4%
第 6位	がん(ガン、癌)	33	1.1%
第 6位	手術	33	1.1%
第 8位	再発	30	1.0%
第 9位	人	26	0.9%
第10位	私	25	0.8%

名詞語彙総数:2991

表2　感想文に用いられている名詞のカテゴリ化

カテゴリ(頻度)	カテゴリに含まれる名詞(出現頻度)
対人(478)	子ども・子・児・小児(140)、母親・父親・弟・家族(126)、ナオ・直也(107)、自分(41)、人(26)、医師・看護師(14)、看護者・医療者(14)、友達(10)
病態(262)	病気(62)、治療(48)、がん(33)、手術(33)、再発(30), 肉腫(12)、剤(11)、疾患(9)、死(9)、腫瘍(8)、転移(7)、
心理(140)	痛み(19)、闘病(19)、心(18)、苦しみ(18)、精神(16)、思い(9)、気持ち(9)、不安(9)、幸せ(9)、心配(7)、ストレス(7)
情報(95)	看護(22)、告知(22)、本(20)、ケア(13)、医療(8)
自己認識(76)	必要(25)、私(25)、理解(13)、大切(11)、自分(2)、
時間(49)	時(19)、時期(10)、時間(5)
コミュニケーション(48)	言葉(13)、説明(13)、サポート(9)
病院環境(44)	入院(14)、病院(11)、退院(10)、生活(9)

表3　動詞出現頻度

	動詞	回数	%
第1位	思う(い、った)	94	5.9%
第2位	考える(られ、よう)	42	2.6%
第3位	できる(た、て、ない)	33	2.1%
第4位	言う(い、われ、って、った)	30	1.9%
第5位	感じる(た)	22	1.4%
第6位	がんばる(り、れ、った)	21	1.3%
第7位	受ける(れ)	19	1.2%
第8位	わかる(かった、り)	16	1.0%
第8位	見える(られ、て)	16	1.0%
第10位	行く(き、って)	15	1.0%
第10位	生きる(かし、きれ)	15	1.0%

動詞語彙総数:1585

理」に関する用語で構成されていた。4つ目のカテゴリは看護、告知、本、ケア、医療などで「情報」に関する用語で構成されていた。5つ目のカテゴリは、必要、私、理解、大切、自分など、学生自身が看護についての認識を深める用語で構成されていたので「自己認識」に関するカテゴリとした。6つ目のカテゴリは、時、時期、時間、毎日、今、最初など、「時間」に関する用語で構成されていた。7つ目のカテゴリは言葉、説明、サポート、話で、「コミュニケーション」に関する用語から構成されていた。8つ目のカテゴリは、入院、病院、退院、生活など、患児の療養生活の場である「病院環境」に関する項目で構成されていた。これらのことから、レポートに使用されている名詞に関する用語は「対人」、「病態」、「心理」、「情報」、「自己認識」、「時間」、「コミュニケーション」、「病院環境」の8つのカテゴリで構成されていた。

3．動詞の出現頻度

表3にレポート全体における動詞の出現頻度を示した。全体における動詞の出現頻度は1585回であり、頻度の多かった順に第1位：思う（い、った）94回、第2位：考える（られ、よう）42回、第3位：できる（た、て、ない）33回、第4位：言う（い、われ、って、った）30回、第5位:感じる（られ）22回、第6位：がんばる（り、れ、った）21回、第7位：受ける（れ）19回、第8位：わかる（った、り）16回と見える（られ、て）が16回で同数、第10位：行く（き、って）と生きる（かし、きれ）が同数の15回であった。

4．動詞によるコロケーション解析

動詞と連動している文脈に注目し、コロケーション解析を行った。表4は動詞の出現頻度の最も多かった「思う・思います。思った」におけるコロケーション解析である。「子どもの生命力の強さに驚いた。その源は生きたいという願望だったと思う。」「患児はとても優しい心の持ち主であった。それは闘病していくなかで培われたものであると思う。」「きっと心のなかではすごく辛かったと思う。」「後何日も持たないときでさえ人を気遣っていたと言うことが印象に残っていて、私より精神的にずっと大人であると思った。」等の患児の理解を深めた文章として使用されているものと、「どんなに笑顔をみせていても、自分の中に苦しみや辛さを抱えていることを理解・共感して看護していきたいと思った。」「私も看護していて、このような言葉を返して安心を与えることができるようになりたいと思います。」のように自己の看護観につながるものとしての文脈で使用されていた。

表5には動詞の出現頻度第2位の「考える・考えさせられた」におけるコロケーション解析を示した。「不必要な活動制限をしないケアが必要であると考える」「ナオの行動は、ストレスを発散させるものであったと考える」「疲労がピークに達し、危機的状況であったと考える」等の状況把握的な文章で使用されているものと、「一生懸命生きることの大切さについて、改めて考えさせられた」「患児と一緒に希望を持って闘病できるようにサポートしていきたいと考える」などの自己の学びや希望・意志・決意を示した文章として使用されているものと、「ナオ君自身さまざまな想いを抱いたのではないかと考える」「心の内の不安を聞くことによっていくらか軽減されるのではないかと考える」等の状況を理解したうえで相手のことを思いやった、推測的な文章で使用されているものとがあった。

表6には出現頻度第3位の「感じる・感じた」におけるコロケーション解析を示した。このなかで「自分が辛い体験をしている分、人にも同じくらい優しくなれるのかなと感じた。」、「優しい気持ちを忘れなかった直也君を私は1人の人間としてすごく尊敬できると感じた。」、「子どもも自分なりに理解していないとがんばって治療を受けられないのではないかと感じた。」などや「私が想像していたもの

表4 「思う・思い・思った」におけるコロケーション解析結果

先 行 文 脈	キーワード
子どもの生命力の強さに驚いた。その源は、生きたいという願望だったと	思う
患児はとても優しい心の持ち主であった。それは闘病していくなかで培われたものであると	思う
直也君は両親から辛い告知を受けた。きっと心のなかではすごく辛かったと	思う
後何日も持たないときでさえ人を気遣っていたと言うことが印象に残っていて、私より精神的にずっと大人であると	思った
彼はそれだけ病気を受け入れ、今の自分を受け入れていたんだと	思います
死を前にした子どもがこんなに強いものかと	思いました
ストレスが溜まると思うので遊びは必要であると	思った
どんなに笑顔をみせていても、自分の中に苦しみや辛さを抱えていることを理解・共感し看護していきたいと	思った
私も看護をしていて、このような言葉を返して安心を与えることができるようになりたいと	思います
親子関係がうまくいっているほど、子どもは病気を乗り越えていくことができると	思います
自分の「死」に対して、幼いながらに自分なりに向き合っていくことができたのではないかと	思います

表5 「考える・考えさせ」におけるコロケーション解析結果

先 行 文 脈	キーワード
不必要な活動抑制をしないケアが必要であると	考える
入院初期に見られたナオの行動は、ストレスを発散させるものであったと	考える
精神的・身体的疲労がピークに達し、危機的状況であったと	考える
ナオ君自身の病気による心理的変化であると	考える
一生懸命生きることの大切さについて、改めて	考えさせられた
小児の闘病は成人以上に家族の援助が必要だと	考える
患児と一緒に希望を持って闘病できるようにサポートしていきたいと	考える
ナオ君自身さまざまな想いを抱いたのではないかと	考える
心の内の不安を聞くことによっていくらか軽減されるのではないかと	考える

表6 「感じる・感じた・」におけるコロケーション解析結果

先 行 文 脈	キーワード
私が想像していたもの以上の心の強さを	感じた
私たちにその命をもっと大切なものを残してくれたと	感じることができた
小児のがん患者における関わりの難しさを	感じた
心から拍手を贈りたいと同時に、私の心の未熟さを	感じた
強い意志を持つことでどれほど人は成長できるのかと、	感じることができた
いたずらをしたりすることは小児にとって良いストレス発散になり大切であると	感じた
自分が辛い体験をしている分、人にも同じくらいやさしくなれるのかなと	感じた
優しい気持ちを忘れなかった直也君を私は一人の人間としてすごく尊敬できると	感じた
子どもも自分なりに理解していないとがんばって治療を受けられないのではないかと	感じた
遊びや友達を作ること、また勉強することも大切であると	感じた
子どもに対する精神的ケアも必要であると	感じた

以上の心の強さを感じた。」、「私たちにその命をもっと大切なものを残してくれたと感じた。」、「小児のがん患者における関わりの難しさを感じた。」「強い意志を持つことでどれほど人は人は成長できるのかと感じることができた。」等であった。

これらの「思う」、「考える」、「感じる」の動詞は「私」、「必要」、「大切」、「精神的」、「理解」等の名詞と連動して使用されていることが多かった。

Ⅳ．考　察

1．名詞の出現頻度について

名詞の出現頻度数は、「子ども」、「ナオ」が最も多く、第2位に「家族」であった。さらに第5位「自分」、第9位「人」でこれらは患児を中心とした人間相互を示している。また「病気」、「治療」が第3位、第4位で、「がん」が第6位、「手術」、「再発」がともに同数の第7位に挙げられている。これらは病気に関係する用語であり、学生は手記の中心をなす患児と彼を取り巻く家族や医療者に関することと、「病気」とその医療手段等に焦点があてられていたことがわかる。第10位の「私」は、手記の読み手としての学生自身である。

2．名詞のカテゴリ化について

5回以上出現した名詞をその類似性に基づいてカテゴリ化すると、対人、病態、心理、情報、自己認識、時間、コミュニケーション、病院環境の8つを抽出することができた。このことは、レポートに用いられている用語の特徴がこの8つのカテゴリに集約されたことを示している。

「対人」のカテゴリでは家族（母親）や医療関係者のほかに友達が挙がっている。学童期の患児にとって学校や友人との関わりは重要であり、このことを学生は手記の中から学びとることができたと考える。

「自己認識」に関するカテゴリでは、必要、私、理解、大切、自分が挙がっている。学生は手記を通して、予後不良疾患と立ち向かっ

ている患児と母親に共感し、自己の看護に対する認識を深めていくことができたと考える。

「心理」のカテゴリでは、痛み、心、精神（的）、思い、ストレスなどの単語がみられた。これらの用語は、病苦と闘っている患児の気持ちや病気に立ち向かっている患児自身を理解しようとする学生の学びとしての「私」、「必要」、「感じた」、「思った」などの単語と連動して使用されていることが多かった。このことからも学生は病児を理解する手がかりとなったと考える。

3．動詞におけるコロケーション解析について

出現頻度の多かった動詞のコロケーション解析結果から「思う」、「考える」、「感じた」については、「子どもの生命力の強さに驚いた。その源は、生きたいという願望だったと思う」、「私が想像していたもの以上の心の強さを感じた」、「ナオ君自身の病気による心理的変化であると考える」で代表されるように患児の立場になって患児の気持ちに共感し、その気持ちを共有し患児の理解につながるものと、「私も看護していて、このような言葉を返して安心を与えることができるようになりたいと思います」、「不必要な活動抑制をしないケアが必要であると考える」、「子どもに対する精神的ケアも必要であると感じた」にみられる自己の小児看護に対する意欲や動機付けとなる学びの2側面の学習効果を得ることができた。

『物語（ナラティブ）は、医療者と患者の間に「橋をかける」働きをもっている。「語る」ことは、「語り手」と、「聞き手」をつなぐことである。病いの物語であり、患者が病気と対峙するプロセスを書いた手記である闘病記もまた、「書き手」と「読み手」をつなぐ役割を担うものである。』（門林 2004）と述べているが、学生は本を読み終えた感想として「患児のがんばりに心が痛んだ。」、「涙がでた。」そして、「自分の心の未熟さを感じた。」とも述べており、学生の感性に深く印象付けられたと考える。

V．結　論

本研究では、慢性疾患を持つ子どもに関する手記における学生の読後感レポートの内容分析を行った。その結果、レポートに使用されていた用語の特徴について以下のことが明らかになった。

1）レポートで用いられている「名詞」では出現頻度の多かった順に子ども（子児、小児、ナオ、直也）、家族（母親、親、両親、兄、弟）、病気、治療、自分、がん（ガン、癌）、手術、人、私であった。

2）レポートに5回以上用いられていた「名詞」において類似しているものをカテゴリ化すると、「対人」、「「病態」、「心理」、「情報」、「自己認識」、「時間」、「コミュニケーション」、「病院環境」の8カテゴリで構成されていた。

3）レポートで用いられている「動詞」において出現頻度の多い順に、思う（い、った）、考える（られ、よう）、できる（た、て、ない）、言う（い、われ、って、った）、感じる（た）、がんばる（り、れ、った）、受ける（れ）、わかる（かった、り）、見える（られ、て）、行く（き、って）、生きる（かし、きれ）であった。

4）出現頻度の多かった動詞における「コロケーション解析」を行った結果、学生は病苦と闘っている患児の立場になって患児の気持ちを共感・共有し、患児を理解することと、さらに学生自身の小児看護に対する認識を深める学びができたといえる。

文　献

門林道子（2004）：現代における「闘病記」の意義（がん闘病記を中心に）．看護教育，45（5）：359－364．